

日本のさわる絵本開発のプロセス

—視覚の^{バリア}障害を超える絵本—

攪上 久子*

The Tactile Picture Book Development Process in Japan:

Picture Books to Overcome visual impairments

Hisako KAKUAGE

Abstract

This study takes up the subject of tactile picture books that can be enjoyed by children with visual impairments. Such books were first made by hand, but recently the publishing of intaglio or relief printed books has increased. Gathering together and organizing records of the tactile picture book development process, this study considers them against the backdrop of the times. The review indicated that the process was entwined with the social backdrop that can be divided into three periods.

The role of the families of children with disabilities is also significant in the creation of tactile picture books, which were not something already available to them. The study also shows how publishers and libraries have encouraged and supported the handcrafting of books by parents, persons with disabilities, and volunteers to respond to these needs. Also discussed is the issue of to what extent such books are really enjoyed by sight-impaired children themselves.

Keywords: Tactile Picture Book, Development Process, Visual Impairments, Barriers of picture books

1 問題と目的

1.1 問題の所在

筆者が1977年盲学校幼稚部に勤務していたとき、兄の帰りを待つ母親たちが、市販の絵本に布やボタンなどを貼って、絵本が見えないわが子のために、絵がさわる絵本を作っていた。1979年に、絵を隆起印刷し、目の見えない子も見える子と一緒に楽しめる『これ、なあに?』（作：バージニア＝A＝イエンセン 訳：きくしまいくえ 偕成社）という絵本が出版された。視覚の^{バリア}障害を超える絵本の一種類に「さわる絵

キーワード：さわる絵本、開発のプロセス、視覚障害、絵本の障害（バリア）

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

本」がある。さわる絵本とは、『絵本の事典』（朝倉書店 2013）によると、「手で見る絵本、指で読む絵本などともいわれる。触素材を貼り付けて絵を構成したものや、点図や立体コピーで絵を構成するものがある。多くの場合、視覚障害のある幼い子どもたちが対象である。さわる絵本の中に布の絵本や点字つき絵本も加える分類の仕方もある。布の絵本と区別する場合は、布の絵本は台紙や主素材が布であり、パーツが取り外せ操作ができるようになっている作品が多い。また、触素材に、さらににおいをつけたにおう絵本やさわると音がでるように工夫した絵本もある。」と説明されている。テキストに関しては文字なし、墨字のみ書かれているもの、点字も表記されているものがある。これらの絵本は、いつ、だれによって、どのように作られ普及していったものなのだろうか。そこには、どのような時代的社会的背景が力となっていたのだろうか。

1.2 先行研究

下田ら（1972）東京教育大学附属盲学校（当時）の教諭たちは、視覚でとらえる部分を、触覚や聴覚におきかえて、あるいは肌のふれあいや、身体全体の感覚を通して楽しむ絵本を考えようと研究した。触画も絵本ととらえ、絵本への導入は、手による探索操作の技能と空間表象の学習とを相互に関連づけて行う必要があるとしている。宮崎ら（1977 1978 1980）は、さわる絵本は積極的に手を触れようとする気持ちを喚起し、感性を高め、将来のコミュニケーション活動を左右する重要な意味を持つとし、4、5、6歳の盲学校幼稚園児童6名に布・革・プラスチック等26種の素材（23 cm×23 cm）をさわってもらい、触材のイメージ調査をしている。そしていろいろな素材があることだけでも、さわる意欲が喚起されることを見出している。加藤（1980 1981 1982）は、文章を点字、絵を半立体的な貼絵にし、触察によって理解できる絵本を自ら開発してきたが、楽しく理解しやすいさわる絵本を提供するためには、制作方法の技術的な諸問題の解決と、その一部の統一を望み、この2点を重点的な研究の目的とした。さわる絵本を、物語り絵本・展開絵本・パズル絵本・匂う絵本の4つに分類し、使用する点字用紙製本等も含め、色彩や貼絵の制作方法を詳細に整理している。小西（2001）はさわる絵本を作りはじめて20年たって、さわる絵本とは何かの説明、歩み、作る際の約束事、使用事例、図書館での所蔵状況などをまとめている。金子（2002）は作製されている触る絵本について、その絵が触ってもよく分からず、従って楽しむこともできない場合があることから、絵が触ってよく分かり、かつ楽しめる触る絵本の作製を試み、それらを3歳～6歳の視覚障害幼児に導入して、その妥当性を検討している。HPの公開資料で、国立国会図書館国際子ども図書館（2005）年表「日本のバリアフリー図書の歩み」がある。ここでは、1876年から2005年までの、さわる絵本も含む児童向けバリアフリー図書の歩みと、図書館の障害者サービスの歩みを一望することができる。攪上（2006）は、バリアフリー絵本のはじまりは、手作りのさわる絵本であるとしている。小笠原（2011）はフランスの小学校の「触れる絵本製作プロジェクト」を紹介しながら、日本の出版されているさわる絵本の現状に触れ、晴眼者と視覚障害者が共に絵本を楽しむことができ、特に視覚障害を持つ親が晴眼者のわが子に読み聞かせをするときには有効であるとしているが、隆起させた輪郭が複雑なため、触覚での読み取りが困難で、複雑な挿絵を時間をかけて触り、理解しようという視覚障害児の意欲を消沈させるような本も存在していると論じている。岩田（2018）は、‘点字つき絵本の出版と普及を考える会’設立までの経緯を記録している。

しかし、今までの先行研究・資料では、さわる絵本を、いつ、だれが、どのように、開発してきたのか、一部のものに関しては資料として記録が残っているが、大半は記録が未開拓である。さらに成立やその開発のプロセスが、時代背景・社会的状況とどう関連があったのかも明らかにされていない。

1.3 本研究の目的

日本のさわる絵本開発のプロセスの記録を開拓し、内容を整理する。そして、それらが時代背景・社会的状況とどう関連があったのかを明らかにする。

1.4 本研究の方法

文献や資料検証を主とする研究の方法をとる。一部はインタビューなどのオーラルヒストリーの内容も含む。

2 さわる絵本開発のプロセス

2.1 美しい、楽しい絵本を「見せて」あげたい ―手作りのさわる絵本―

鈴木（1985）の盲教育史によると、1878年日本で初めての特殊教育（京都盲啞院）が幕を開け、1890年日本点字が完成すると、見えない人たちの識字率は大幅に向上し、彼らへの読書の機会を大きく広げた。1904年東京盲学校で圧出させた地図が生徒のために考案され、さらに1929年に作られた盲学校独自の教科書には挿絵が点図で描かれている。下田ら（1972）は、それでもその後長い間、その教科書ですら、小中学校の教科書の字の部分だけを点訳しただけで、絵や図はわからないだろうと、さし絵がはぶかれたままであったと述べている。

手作りのさわる絵本は、1960年代から盲学校の教師や教会関係者などで制作されていたようだが、明確な記録が残っていない。記録に残っている一番古いさわる絵本制作団体は、兵庫の‘こぼとグループ’である。さわる絵本を盲学校に寄贈していた牧師の転勤で、子どもたちにさわる絵本が届かなくなり、寂しい思いをしているという1967年の新聞記事を見た、子育て中の主婦らが「目の不自由な子どもたちに喜んでもらえるように」とさわる絵本作りをはじめたという。同団体は、神戸市立盲学校（当時）の教諭福来四郎に指導を受けている¹。名古屋でも、盲学校の教員であった金森なをから指導を受け、1971年頃から光が丘女子高校内のサークルや1975年頃には聖マタイ教会内の‘ロバの会’で制作がされていた。のちに布絵本に移行した‘たねの会’などでも1977年からさわる絵本を作っていた（たねの会1997）。

全国視覚障害児を持つ親の会の矢部万寿子は、1973年さわる絵本の‘子ひばり文庫’を開き、100冊ほどの自分たち手作りのさわる絵本の蔵書を持ち、全国にも貸し出しをした。6年後、子の成長とともに文庫の活動を閉じている（矢部1989）。矢部はその時の気持ちを「私たち、視覚障害児を持つ親たちは誰でも、自分の子供に対して、視覚に障害はあるが、いま豊富に出まわっている、美しい、楽しい絵本を『見せて』やりたい、という切実な願いを持っている。」（矢部1974: 20）と述べている。

1974年1月東京都品川区内の点訳グループであった‘むつき会’でもさわる絵本作りが事業化され、第1作目のさわる絵本の完成は同年11月であった（むつき会2000）。むつき会の絵本の中に匂う絵本があるが、これは1976年ごろ自分たちが作ったさわる絵本を盲学校に届けに行ったときに、その絵本でも関心を持たない子どもの姿を見て、「匂う絵本」を思いついたのだという。香料を使ったさわるカードのようなものを作る事は、さほど困難ではないが、1冊の絵本の中に、いろいろな匂いのページを作ること、さらには籠の中にいくつもの果物があるページもあり、その一つ一つの匂いが混じらないようにする事は容易ではなかった。加藤は、香料会社に掛け合い、爪で軽く引っ搔くと匂いが出る特殊なカプセルの開発を依頼し、ページを繰ると現れる果物の匂いが楽しめる絵本を開発した。この「匂う絵本」は数パターンの作品が生まれ、全国の視覚特別支援学校に届けられている²。むつき会で作られた絵本は1975年3月から今日まで品川区立図書館が貸し出しを請けおい、品川区内の利用希望者だけでなく、地域の図書館を通じ全国の利用者に貸し出されている。2018年3月31日現在、品川区立図書館蔵書数は758タイトルである。

小西（2001）によると、1975年3月、品川の図書館で出合ったさわる絵本を、当時大阪の図書館員であった小西萬知子が借りて大阪で紹介すると、目の見えない児を持つ柏木順子ら母親たちから大きな反響がおきた。さわる絵本を見て喜ぶ子どもたちの姿に、大阪の母親たちも、自分たちも作ろうと1976年むつき会から指導を受けながら、さわる絵本をつくる会‘つみき’が結成された。柏木は「ある日、3人の娘を寝かせながらいつものように、本を読んでおきますと、絵を見ることの出来ない娘が、本の上を手探りでさ

わりだしたのです。一瞬、私は胸のしめつけられる思いをいたしました。後日、以前東京から借りてきた1冊の手で見られる絵本（『おばあさんのスプーン』）を出してやりました。娘はしきりに手探りでさわり、2人の姉たちも、始めてみる絵本に『すごいなあ』と大喜びです。毎日毎日、同じ本を読んでほしいとせがまれました。数日たったある日、姉が妹に読んでやっているのが、目にとまりました。そして今度は、全盲の妹が、絵をさわりながら、姉と話しているではありませんか。『これ、ネズミ。これ、スプーン』と。」（柏木 2001:451）と、娘がさわる絵本を喜ぶ様子を記している。小西らは、目の見えない子どもたちが、この社会で生活していくときに、見える子があたり前に知っていることを、知らないでいるということがないようにと願い、創作ではなく、見える子どもたちにその時評価の高い市販の絵本を積極的にさわる絵本化するという方針で、さわる絵本を制作していった。そして制作講座を各地で開き、1982年京阪神12グループで‘さわる絵本連絡協議会大阪’を結成した（攪上 2017）。

これらのさわる絵本は、1976年に制作が始まった手作りの布の絵本とともに、児童書出版社偕成社内に結成された布の絵本研究連絡会が企画した“手作り布の絵本さわる絵本展”（朝日新聞厚生文化事業団主催）で、1979年から1986年まで国内を巡回した。このことにより、全国的に知る人が現れ、制作者も増えていった。その一例として、1979年に設立された仙台の‘触察絵本の会わか草’の設立者菅原はつ子は、点訳を習っていたが、この展示を東京で見て驚き、このような絵本を作りたいと思ったと会設立の動機を述べている³。1981年国際障害者年に、ユネスコと国際児童図書評議会（IBBY）⁴が、ボローニャで開催した“本と障害児展”と、その後の巡回展で、むつき会のさわる絵本は評判となり、展示会場から去りがたく長く残る見えない子どもたちの姿が、新聞で報じられている⁵。

初期の頃、さわる絵本は市販の絵本に触覚の近いものを、絵のとおり貼り付けていくというような作り方からはじまった。そうした貼り絵では、間違った認識が生じる。例えば、遠近法では近くのは大きく、遠くのは小さく描かれるが、それを実際の大きさと勘違いする。動物などの横向きは、脚が重なり2本で描かれていると、4本脚の動物の足を2本だと思ってしまうなど、視覚障害教育の専門家からは厳しい指摘も多かった。その中にあって、東京教育大学附属盲学校（現筑波大学附属視覚特別支援学校）の教諭であった下田知江は、盲児用絵本の制作を自らも試み（下田 1972）、さわる絵本作りを自校の親にも指導し、ボランティアの作り手さらには研究者にも協力し、その制作を応援した⁶。こうした研究者のさわる絵本関連研究では、千葉大学工学部の宮崎紀郎ら（1977 1978 1980）の、視覚障害児の絵本に用いる触材に関する研究や、国立特殊教育総合研究所の金子健（2002）の視覚障害児のための触る絵本の作製と活用および普及についての研究などがあるが、それらの研究が現状のさわる絵本制作に反映した様子は残念だがほとんどみられない。

2.2 自分の子に絵本を読んであげたい ―てんやく絵本―

北九州市で産まれた岩田美津子は先天性緑内障で、幼少時はわずかながら見えていたが、福岡県立盲学校高等部に進学した頃には、眼球摘出もあり全盲となった。大阪で結婚した後、ふたりの子の母となる。岩田は「今から40年前、1歳を過ぎた長男と一緒に絵本を読みたいと思ったとき、周囲を見渡してもその願いに答えてくれる絵本は皆無だった。当時見えない子どもたちのために、ボランティアで手づくりされている『さわる絵本』や『布の絵本』は少しずつではじめていたが、わが子は晴眼である。誰もがあたり前のように、図書館や書店で手にいれた絵本を楽しんでいるように、私も我が子とたのしみたかった。」（岩田 2018:52）と述べている。岩田は、前述のさわる絵本の会つみきの小西らが作成したさわる絵本を利用し、晴眼の息子に絵本を読んであげていたが、長男が4歳になると長いお話の絵本を好むようになり、いままでのさわる絵本では物足りなくなっていた。そこで、一般に市販されている絵本の文章を塩化ビニール製の透明なシートに点訳し、原本の活字部分に貼付し、同じシートで絵を形づくって貼りこみ、さらに説明文を書き添えた‘てんやく絵本’の作成を1981年ころからはじめた（岩田 1992）。当時のことを「はじめてのてんやく絵本が完成したのは、長男が5歳、次男が2歳のときでした。そのと

きの、子どもたちの様子を、今も忘れることはできません。絵本を手にも、飛び跳ねながら私のところにやってきて、『読んで、読んで』とせがみ、二人が両側から私の膝に乗ってきたのです。その1冊を、繰り返し、何度読んだかわかりません。子どもたちは膝に乗かって、私の声で読んでもらい、一緒に笑ったり驚いたり……絵本を通して、同じ時間を共有できることを、楽しんでいるようでした。」と岩田は回想している(岩田 2015: 6)。ボランティアたちと制作したそのてんやく絵本が、100冊を超えた1984年、小西のアドバイスにより自宅で‘岩田文庫’を開設し、全国の見えない母親たちにもてんやく絵本の貸出をはじめた(岩田 1992)。立ちはだかったのは貸出返却の際にかかる高額な郵送費であった。1961年から盲人用郵便無料制度はあったが、てんやく絵本は市販絵本を使用しているため、ふつうの郵送費がかかり、貸出の活動はままならなかった。小西や岩田は、郵政省に働きかけ、1987年てんやく絵本のように墨字のある本も盲人用郵便として郵送料無料化を実現した。1991年岩田文庫は活動拠点を大阪市西区に移し、名称を‘てんやく絵本 ふれあい文庫’と改称した。2005年現在地(大阪市西区江戸堀)に活動拠点を移し、2012年NPO法人格を取得した。2017年度年間報告によると、蔵書11,482タイトル、貸出総数4216冊という活動実績である。

さらに岩田は、点字つき絵本の出版と普及のために、‘点字つき絵本の出版と普及を考える会’を2002年に発足している。この活動については後述する。また、NPO法人ブックスタートでは、親子に手渡す絵本の候補となる「ブックスタート赤ちゃん絵本」を、自治体からの依頼に応じててんやく絵本へ交換する取り組みを行っているが、この交換用のてんやく絵本の製作は、てんやく絵本ふれあい文庫が協力している。

2.3 さわる絵本の商業出版

日本におけるさわる絵本の商業出版は、1979年翻訳出版された『これ、なあに?』(作: バージニア=A=イエンセン 訳: きくしまいくえ 偕成社)が初となる。この絵本は、絵を隆起印刷したさわる絵本である。原書はデンマークでCo-Production(共同出版)で出版された。印刷技術の進歩として隆起印刷が可能になったことやスパイラル製本等の技術の進歩などが背景にある。この絵本は『ちびまるのぼうけん』(作: フィリップ・ヌート 訳: 山内清子 1981)『ザラザラくん どうしたの?』(作: バージニア=A=イエンセン 訳: きくしまいくえ 1983)と3冊シリーズで日本でも偕成社から翻訳出版されている。『これ、なあに?』は、当時9刷5万部という、こうした絵本として画期的な販売数を記録した(攪上 2008)。登場人物を視覚的なイメージを必要としない幾何学的な形や手触りの違いで表現し、先天的に見えない子どもたちも、見える子どもたちにも楽しい絵本になっている(図1)。



図1 『これ なあに?』(作: バージニア=A=イエンセン 訳: きくしまいくえ 偕成社)

右ページに触覚で認識できる登場人物(ザラザラくん・バラバラくん・ぼつぼつちゃん・シマシマくん・ツルツルくん)が勢ぞろいしている。この登場人物の命名は当時盲学校の児童たちが行った。

初版発行当時この本の出版実現には、偕成社の二人の編集者鴻池守と中島信道が大きく関わっている。二人は障害のある子の父親でもあり、この絵本の出版のみならず、日本のバリアフリー絵本の歴史を作っ

た⁷。『これ、なあに？』が刊行された時のことを、鴻池はこう語っている。「永い間子どもの本の編集に携わって『すべての子どもに読書の喜びを』といいながら、私たちは視覚や聴覚や言語や知能や肢体等に障害のある子どもたちのことを『子ども』の仲間に入れてきてなかったことに気がつかされた。そのきっかけは、私に重度の知恵遅れの息子がいたことと、ふきのとう文庫の小林静江さんやむつき会の加藤千代子さんに会ったこと。小林さんは紙ではなく布で作ったスナップやマジックや紐、ボタンなどをかけたりはずしたりしながら遊び学ぶ『布の絵本』を、加藤さんは視覚障害児のために絵をさまざまな素材で表現し手作りしたさわる絵本を持って、私の前に現れた。それらの絵本はどれも『印刷できない本』だった。それは編集者として、人間として、私への大事な提案となり、だからこそ、海外で、この印刷できるさわる絵本と出合った時、その思いの結実として翻訳出版を実現した⁸。」中島はこの本の広報を手掛けている。本に挟み込まれたパンフレットには「目の見えない子も、見える子も、一緒に楽しめる 世界で初めての異色の絵本!!」、「目の見えない子と 見える子の 心のかけ橋となる 画期的な絵本」と書かれ、見えない子と見える子が一緒にこの絵本を楽しんでいる写真が掲載されている。

1983年には国内唯一の点字学習雑誌「テルミ」が創刊されている。創刊号からテルミを制作している田中（2018）によると、形を絵と文章で伝えることを大きな狙いとし、雑誌名は「手で見る」の語順を変えて「テルミ」と命名した。当時開発された発泡印刷の技術を使い、点字や絵の隆起印刷がされている。1983年創刊以来35年間、隔月発行で、価格は当時から変わらぬ2019年3月現在も400円である⁹。

1996年こぐま社より、わが国初のフルカラーの点字付き絵本『チョキチョコキチョコッキン』（作：ひぐちみちこ いわたみつこ 発行：ふれあい文庫）が出版された。この絵本は、岩田の「図書館や書店の棚に点字がついた絵本が並んでいてほしい」という願いを印刷会社やこぐま社の協力で実現したものである。

岩田は2002年4月に、これまで点字がついたさわる絵本を出版したことがある6出版社などに呼びかけて、「点字つき絵本の出版と普及を考える会」を発足した。この会では、出版社の垣根を越えて、点字や盛り上げ絵の工夫、印刷、製本、流通や広報など、点字つき絵本出版にあたって引き起こされるさまざまなバリアを、共同で考えあい知恵を交換して乗り越えてきている。その後この会が後押しし、12冊の新刊、4冊の翻訳出版、5冊の再版・復刊が実現している(2019年3月現在)。

なかでも、点字つき絵本の出版と普及を考える会10周年を記念してのくてんじつきさわるえほん 偕成社・こぐま社・小学館3社同時出版企画の1冊であった、『さわるめいろ』（著・デザイン：村山純子 協力：点字つき絵本の出版と普及を考える会 小学館 2013）は、2014年、第61回産経児童出版文化賞大賞を受賞した。この受賞は、点字つき絵本が、一般の絵本として評価されたことを意味する。

このような購入できる点字つきさわる絵本の出現は、図書館での点字絵本の所蔵率を上げている。国立国会図書館の2018年8月発表「平成30年度公共図書館における障害者サービスに関する調査研究」によれば、2010年における公共図書館での点字絵本所蔵率は17.9%であったが、2018年になると、66.6%と大きく上昇している。この調査では、障害者差別解消法による、合理的配慮の提供が義務付けられたことは、図書館などでの所蔵率の増加に大きな影響があったと調査報告されている。

日本で出版されている主なさわる絵本には、現状ふたつのタイプがある。絵本の通常の絵（見える子たちが見ている絵）の上に、その絵を翻案・省略・変形し、さわってわかりやすい絵に工夫し、それを透明に隆起印刷してある絵本と、もうひとつは、前頁でとりあげた『これ、なあに？』のようにさわる絵が視覚イメージの必要のないものでできており、見えても見えなくてもそれぞれの読み方楽しみ方ができる絵本とがある。前者の場合、かなり工夫して絵を隆起印刷しているが、現状は視覚に障害のある幼児には、さわる絵を理解することはかなり難しい場合が多い。

3 時代背景・社会的状況

日本で手作りさわる絵本が誕生しだした1960年代はノーマライゼーション思想（障害がある人とな

人とが平等に生活する社会を実現させる理念)が、北欧で誕生し成熟していった時代である。日本では1970年代、全員就学をめざす学籍保障が、世界の趨勢であるノーマライゼーションへの動きに逆行するような分離教育体制である養護学校義務化によってなされようとすることに對し、共に育つ教育を求める当事者・保護者・教育関係者などの抵抗闘争がおきた。米国の障害者の自立生活運動(IL運動)は、1970年代初めに活発に展開したが、日本もその影響を受け障害者の権利運動や差別闘争を活発化していった。

1981年「完全参加と平等」をテーマとする国際障害者年に、イタリアのボローニャ児童図書展で、〈本と障害児に関するセミナー〉が開かれた。‘The Role of Children's Books in Integrating Handicapped Children into Everyday Life’ (日常生活に障害児を統合する際の児童書の役割)というタイトルで基調講演を行ったのは、当時ノルウェー国立特殊教育研究所の助教授であったトーディス・ウーリアセーターであった。この基調講演で、ウーリアセーターは、子どもの本に関わる人すべて—編集者・作家・画家・図書館員等—が、障害のある子どもと本をめぐる問題を正しく理解し、世界中の障害がある子どもたちが、良い本に数多くアクセスできるように、国際障害者年以降の長期的な計画と実行を訴えた。この時同時に“本と障害児展”も開催された(攪上 2015)。

図書館では1972年に「ユネスコ公共図書館宣言」の改訂があり、「障害をもった読者」という項が新たに設けられた。日本でも、障害者を「図書館利用に障害がある人たち」と捉える考え方が提示されるようになる。「公の費用により、すべての住民を対象とする図書館は、住民一人ひとりが利用できるものでなければ、公平な公共図書館とはいえないでしょう。そういうことから、身障者の利用できない図書館は、欠陥図書館だと言っている人もあるくらいです。つまり、障害はむしろ、図書館側にあるということでしょう。」(福島 1977: 89)という主張もされた。そこには図書館員の多数派ではなくとも、作成が始まったさわる絵本を、図書館の児童資料として受け入れ、それを生かす活動をしていった図書館員が存在した。

日本のさわる絵本の出版が、点字つき絵本の出版と普及を考える会によって動き始めたころは、世界では2001年の世界保健機構(以下WHO)の障害を社会的モデルからとらえる障害観の転換があった¹⁰。1994年のサラマンカ声明ではインクルーシブ教育が宣言され、日本では2007年より、ニュアンスは違うが特別支援教育という形で導入された。共生ということだが、障害ということのみならず、多文化共生というようなことばでも使われるようになり「一緒に」ということが、それほど特別な人たちの主張でなく、普通に語られるようになっていった。おもちゃや日常品にも共遊玩具・共用品の考え方が広がり、点字つき絵本の出版と普及を考える会での出版活動は、実際には2007、8年から動きだしているが、絶対数の少ない点字を使う視覚障害のある子どもたちだけをマーケットに出版はせず、「見える人も見えない人も一緒に絵本を楽しみたい」をキャッチフレーズに点字つき絵本を刊行している¹¹。

近年の大きな障害者をめぐる世界レベルの動きは、「障害者の権利に関する条約(Convention on the Rights of Persons with Disabilities)」の2006年12月国連総会での採択である。ここに、障害のある人の基本的人権を促進・保護すること、固有の尊厳の尊重を促進することを目的とする「世界人権宣言」に準ずる国際的原則〈障害者の人権宣言〉が生まれ、障害に関するあらゆる差別を(意図的でない場合も)禁止するとともに必要な配慮の提供を求められるようになった。日本政府は2014年1月20日批准書を国連に寄託し、同年2月19日に国内で発効した。その批准を前に、国内法の整備が必要で、その中の1つに「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(通称:障害者差別解消法)」の成立(2013年6月)があった。障害者差別解消法では、公的機関に合理的配慮の提供が義務付けられ、図書館などでは資料の配備等が求められるようになり、購入できるさわる絵本の所蔵率の増加に大きな影響があった。

また、権利条約批准に向けての法改正の先取りとして著作権法が2009年6月に改正された(2010年1月1日施行)。図書利用に障害がある人のための特別な複製・翻案・リライト制作・配信などについて対象施設・対象者・複製方法が拡大された。この改正により、図書館などでの資料の複製やリライトが容易になり、図書館利用に障害がある人々の読書の権利や、実際の利用資料の大幅な拡大をもたらした。

4 総合考察

さわる絵本の成立と開発のプロセスは、表 1 のように 3 つの時代背景と関連が見いだせる。

- (1) 北欧で起きたノーマライゼーション思想と、米国の自立生活運動の影響をうけながら 1981 年の国際障害者年に向かう時代に、アクセスできる本としてさわる絵本が制作されるようになっていった。
- (2) 2001 年 WHO は障害を社会的モデルからとらえる障害観に転換し、共生共生ということばが障害のみならず多文化多様性の中でも使われだし、1994 年のサラマンカ声明によるインクルーシブ教育が日本では 2007 年より特別支援教育という形で導入された時代に入ると、一緒に楽しむ本、みんなの本としてのさわる絵本が志向されていった。
- (3) 2014 年国内で発効した 障害者の権利に関する条約が、普及や出版を支える購買数や図書館の資料所蔵数増加に影響をあたえている。

さらに作り手側には、視覚障害のある子の家族の存在が大きく、必要とする本がなかったことに対し、親・当事者・ボランティアが手作りで産み出したものを、出版社や図書館が応援してきたという構造も明らかになった。

表 1 さわる絵本の動きと時代背景

時代背景	さわる絵本の動き
1950－1990 ノーマライゼーション理念の普及・自立生活運動 活 発な障害者運動 ↓ 1981 国際障害者年	アクセスできる本が制作されるようになった 時期
1990－2010 サラマンカ声明（インクルーシブ教育） WHO 国際生活機能分類（障害を社会モデルからとら える）	一緒に楽しむ本、みんなの本という志向がされ た時期
2010－ 著作権法の改正 障害者の権利条約→障害者差別解消法（合理的配慮）	購買数・図書館所蔵率増加

5 今後の課題

視覚の障害を超える絵本としてさわる絵本の制作が取り組まれるようになり、権利としての読書の保障が形になったことが評価された時代から、さわる絵本はさらなる質の問い直しの時期を迎えているといえる。見えないという状態は多様である。多様なアプローチの開発が求められる。と同時に見えない子も見える子も一緒に楽しめる絵本も求められている。

以下を現在さわる絵本が抱えている課題と考える。そこには共生あるいは、インクルージョンということはいったいどういうことなのかという、本質的な問いも隠れているのではないかと考えている。

- (1) 視覚障害のある子に絵本は必要なのか。
- (2) 見るものをさわるようにして作られるさわる絵本は「絵本」なのか。
- (3) 見える世界を理解させることは必要なのか。

- (4) 視覚障害のある幼い子どもたちが、心から楽しめる絵本がないのではないか。
- (5) 一緒に同じ本が楽しめるというが、原絵を翻案、省略、変形し、さわる絵にして元の絵の上に隆起印刷した絵本は、元の絵が見える受け手と、翻案された絵をさわる受け手にとって、同じ絵本といえるのか。作家側も、表現者として、翻案され変形された自分の作品を受け入れなくてはならない。それが本当に同質の作品なのだろうか。
- これらは、今後の研究課題とする。

註

- ¹ こばとグループ現代表須藤江佐子さんに、設立当時のことを2018年12月11日インタビューした。福来四郎氏は1950年から1980年3月まで、神戸市立盲学校の教諭として、視覚障害の子どもたちに粘土による造形を指導した。これは日本に限らず世界でも、さががけであった。『見たことないもん 作られへん!』講談社1969などの著書がある。
- ² 2018年9月18日設立者加藤千代子氏にインタビューした内容による。
- ³ 2018年6月3日設立者菅原はつ子氏にインタビューした内容による。
- ⁴ 国際児童図書評議会 (IBBY: International Board on Books for Young People) は、1953年に設立された、子どもと子どもの本に関わるすべての人をつなぐ非営利の世界的ネットワーク。現在79か国が加盟、本部はスイスのバーゼルにある。1985年IBBY 障害児図書資料センターがIBBYの中に設立された。
- ⁵ むつき会には、当時の南ドイツ新聞のコピーが保存されている。
- ⁶ 当時筆者は下田知江氏と一緒に盲学校で働いていた。
- ⁷ バリアフリー絵本には以下の4つの種類があると筆者は考える。(1)絵本の障害(バリア)を超えるための絵本【FOR】、(2)障害(バリア)について知る絵本【ABOUT】、(3)当事者によって製作された絵本【BY】、(4)障害のあるなしにかかわらず、共に楽しめる絵本【WITH】。1970-2000年にかけて、偕成社はこの二人の編集者を中心に、4種類すべてのバリアフリー絵本に関し先駆的で活発な出版活動を展開した(今村廣 1987)。また、二人とも故人(中島氏は2000年、鴻池氏は2009年死去)であるが、生前筆者は親交があった。
- ⁸ これは、鴻池守「印刷の可能性を拓ける視覚障害児の絵本—ビジュアルからアンビジュアルへ—」印刷文化論32ダイヤ No.57の掲載記事のコピーを生前筆者が鴻池氏からいただいたものであるが、発行年度が不明。同じような発言は2005年国際子ども図書館で開催した「読書の楽しみをすべての子どもたちに」シンポジウム「バリアフリー図書の普及を願って—図書館と出版の協働」の記録にも残っている。<http://www.kodomo.go.jp/event/event/pdf/symposium.pdf> (2019年3月31日取得)
- ⁹ 小学館内にある、日本児童教育振興財団の助成を受けることで実現できている販売価格である。
- ¹⁰ WHOは、2001年に「国際生活機能分類(International Classification of Functioning, Disability and Health (以下、ICF))」を採択した。ICFは、人間の生活機能と障害の分類法であり、この特徴はこれまでのマイナス面で分類するという考え方が中心であったのに対し、生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えた。「障害者」を「身体の不自由な人」というように個人に起因すると考えるのではなく、環境との関連の中で認識し、環境の未整備により「活動が制限されている人」、「参加が制約されている人」として理解するという方向を示した。障害の医学モデルから社会モデルへの転換である。
- ¹¹ この会が作成している「点字つき絵本・さわる絵本リスト」冒頭にこのフレーズが書かれている。

文献

- 福島宏子, 1977, 「図書館利用障害者サービス」森崎震二編著『今図書館では』草土文化, 89-90.
- 今村廣, 1987, 『偕成社五十年の歩み』偕成社.
- 岩田美津子, 1992, 『見えないお母さん絵本を読む—見えるあなたへのメッセージ』せせらぎ出版.
- 岩田美津子, 2015, 「ふれあい文庫三十年の歩み」『こどものとしょかん』146 東京子ども図書館, 6.

- 岩田美津子, 2018, 「すべての親子に絵本の喜びを一てんやく絵本ふれあい文庫の活動」 児童図書館研究会編『年報 こどもの図書館 2017 年版』日本図書館協会, 52-56.
- 攪上久子, 2006, 「日本のバリアフリー絵本-その現状と可能性」『絵本学』8 絵本学会.
- 攪上久子, 2008, 「目の見える人と、見えない人が楽しみを共有できる世界初の絵本復刊」『絵本 BOOKEND 2008』絵本学会, 87-88.
- 攪上久子, 2015, 「子どもの本の可能性を拓いた女性たち 国境に子どもの本の橋をかけたイエラ・レップマンと読書のインクルージョンをめざしたトーディス・ウーリアセーター」『下田歌子研究所年報第 1 号 女性と文化』学校法人実践女子学園下田歌子研究所, 86-106.
- 攪上久子, 2017, 「バリアフリー手作り絵本」和田直人編『手作り絵本 SMILE』朝倉書店, 90-101.
- 金子健, 2002, 「視覚障害児のための触る絵本の作製と活用および普及についての研究（触素材及び立体コピーによる触る絵本の作製方法—自作と翻案による 13 種の触る絵本の作製方法と立体コピーの原図—」平成 12 年度～平成 13 年度科学研究費補助金奨励研究（A）研究成果報告書, 独立行政法人国立特殊教育総合研究所.
- 柏木順子, 2001, 「さわる絵本: 大阪での試み」『図書館界』53(4): 451-452.
- 加藤千代子, 1980, 「視覚障害者に対する“さわる絵本”の開発に関する研究」主任研究者竹下精紀, 福祉機器の開発と利用に関する研究 昭和 55 年度厚生省心身障害研究報告書, 厚生省.
- 加藤千代子, 1981, 「視覚障害者に対する“さわる絵本”の開発に関する研究」主任研究者 竹下精紀, 福祉機器の開発と利用に関する研究 昭和 56 年度厚生省心身障害研究報告書, 厚生省.
- 加藤千代子, 1982, 「“さわる絵本”の開発に関する研究」主任研究者 苦米地孝之助, 昭和 57 年度福祉機器の開発と利用に関する研究 厚生省心身障害研究報告書, 厚生省.
- 国立国会図書館国際子ども図書館, 2005, 「年表日本のバリアフリー図書の歩み」, 国立国会図書館国際子ども図書館ホームページ, (<https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/chrono.pdf> 2019 年 3 月 31 日取得).
- 国立国会図書館, 2010, 『平成 22 年度公共図書館における障害者サービスに関する調査研究』
- 国立国会図書館, 2018, 『平成 30 年度公共図書館における障害者サービスに関する調査研究』
- 小西 萬知子, 2001, 「さわる絵本: 大阪での試み」図書館界 53(4): 442-454.
- 鴻池守, (刊行年不明) 「印刷の可能性を拓ける視覚障害児の絵本—ビジュアルからアンビジュアルへ—」印刷文化論・32 ダイヤ No.57.
- 宮崎紀郎・吉田光利, 1977, 日本デザイン学会第 24 回研究発表大会概要集, 「盲児のための絵本制作に関する考察」デザイン学研究(26): 116-117.
- 宮崎紀郎・石毛理栄, 1978, 日本デザイン学会第 25 回研究発表大会概要集, 「視覚障害児のための絵本製作に関する研究（第 3 報）」デザイン学研究 (28): 130-131.
- 宮崎紀郎・石毛理栄・湊幸衛, 1980, 日本デザイン学会第 27 回研究発表大会概要集, 「さわる絵本製作のための基礎研究—視覚障害者の感触特性調査」デザイン学研究 (32): 152-153.
- むつき会, 2000, 「《むつき会》の‘あゆみ’」
- 小笠原文, 2011, 「触れる絵本」の製作についての一考察—造形表現プログラムの提案, 『広島文化学園大学学芸学部紀要』, 111-120.
- 下田知江・大川原潔・香川邦夫・瀬尾政雄, 1972, 日本特殊教育学会第 10 回大会発表論文集, 「盲児用絵本の試作」
- 鈴木力二, 1985, 『図説盲教育史事典』日本図書センター.
- 田中喜代司, 2018, 「手で見る世界を描く—視覚障害の子供向け雑誌「テルミ」創刊から 35 年製作」, 日本経済新聞 2018 年 10 月 10 日朝刊 42 面投稿記事.
- たねの会, 1997, 「たねの会 20 年のあゆみ—たね」.
- 矢部万寿子, 1974, 「盲児の絵本」『新時代』第 4 号 No.23: 20-23.
- 矢部万寿子, 1989, 「さわる絵本作りの喜び」『図書館雑誌』83(10): 654.